



吉野川第一期改修百周年に向けて⑨

近代徳島における吉野川の「水利」について

～阿波藍の衰退と地域産業の転換（前編）～

石井町文化財保護審議会委員 立石 恵嗣



一 吉野川の「水利」－治水と利水－

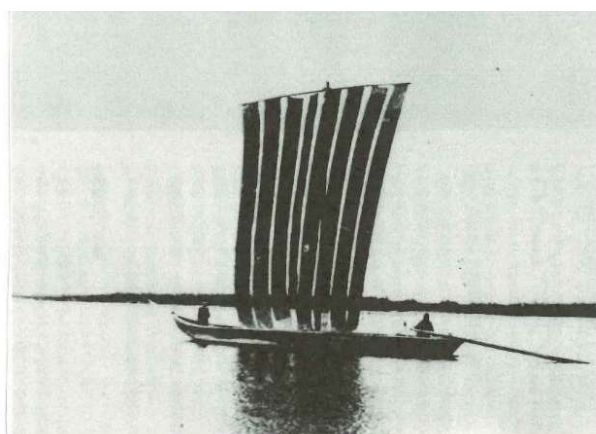
「水利」という言葉は、「治水」と「利水」を意味します。治水と利水は本来不可分のもので、洪水・氾濫を制御する「治水」は生活基盤の根幹であり、水を利・活用する「利水」により人間は文化や文明を生み育ててきました。

私たちの吉野川も「母なる暴れ川」と呼ばれ、洪水・氾濫によって流域に肥沃な土壌を堆積してきました。流域の人びとは、大河と粘り強く格闘しながら、その猛威を逆手にとって恵みを利用してきたのです。

また水運の盛んであった江戸時代や明治期のはじめまで吉野川は物流の大動脈としても大活躍しました。母なる暴れ川と流域の人びととの歩みは、「水利」があやなすドラマであるといえるでしょう。



【写真 1】 藍の白花・赤花
『天半藍色』より



【写真 2】 吉野川は物流の大動脈。活躍した
「平田舟」 『四国三郎物語』より

二 吉野川の「水利」と流域産業

原始・古代では、大河はあらがうことのできない「畏きもの」であり、神として畏怖の対象でした。流れるところが川筋（水路）となり大河のなすがままでしたが、流域の人びとはしたたかでした。

吉野川流域では室町時代から藍作が行われてきたことが近年の研究により歴史的に明らかになってきました。



【写真 3】 吉野川流域史上最大の農産物
「タデ藍」

吉野川流域の肥沃な沖積土はタデ藍の成育に適合し、藍作農民の奮闘や藩の奨励策も効を奏して日本一の藍作地帯に育て上げられました。藍染め染料の「染（すくも）」や「藍玉」※は全国に販売路を広げ「阿波の藍か、藍の阿波か」と謳われて名実ともに全国を席卷したのです。恵みである肥沃な土壌を生かした藍作は、流域の人びとの叡智と努力により阿波藍の隆盛と地域の繁栄をもたらしたのです。

※「染」は葉藍を乾燥して水を加え発酵させたもの。「藍玉」は染を突き固めたもの。ここでいう「阿波藍」とは藍染め染料のことを指す。

『藍農工作之風景略図』（石井町蔵）に見る藍づくり作業（図1、2、3）



【写真4】阿波藍の繁栄を物語る豪壮な藍屋敷
「武知家住宅」

（石井町提供）



【図1】葉藍の刈り取り



【図3】藍玉つき



【図2】藍粉なし（葉藍の乾燥）

三 明治期における吉野川の「水利」

近代における吉野川の「水利」を、水利と治水の観点から前編と後編に分けて考えてみたいと思います。

1. 基幹産業阿波藍の不振と産業転換の模索

天然藍作物による藍染めは人類の最も古くから行われていた染色・染織の方法です。世界各地には風土や気候に合わせた藍染めが行われてきました。

日本での藍染め法の主流は、「染（すくも）」という「タデ藍」の藍葉を乾燥・発酵させてつくられていた青色染料が使われてきました。吉野川流域で栽培された阿波藍は品質・生産量ともに優れ、日本一の名声を博しました。

ところがこの地域を支える基幹産業として隆盛した阿波藍業が、明治期に入る開国によりと安価なインド藍（沈殿藍※）や各地の藍業の台頭により苦戦を強いられはじめたのです。明治期後半にはドイツで開発された化学合成藍の本格的流入により、経営的に太刀打ちすることが難しくなりました。

基幹産業であった藍業の不振や衰退は、産業経済の停滞をもたらした地域の地盤沈下が起こりかねません。このため藍業界の劣勢を挽回すべく伝統的な製法による染（すくも）に代わる「外藍」（インド藍・化学藍）に対抗できる新しい製造法による染料の開発に官民挙げての取り組みがはじまりました。

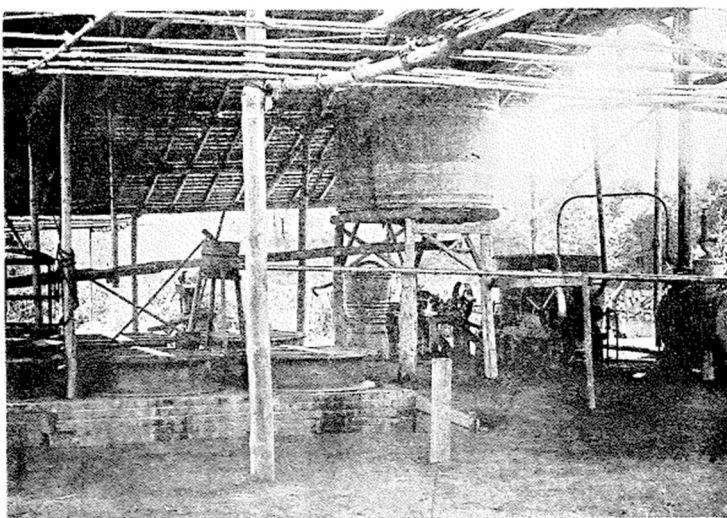
全国的にも五代 友厚や渋沢 栄一など日本の資本主義社会を牽引していった実業家たちは新たな「沈殿藍」による藍染料づくりに挑みました。五代は「朝陽館」という新工場を建設し、渋沢は小笠原諸島での藍づくりに挑戦したのです。

※「沈殿藍」は、葉藍に水を加え、腐食させ染料成分（インディゴ）を沈殿させてつくる方法

しかしながらタデ藍など日本産の藍含有植物を使用する沈殿藍づくりは、インド藍のような熱帯や亜熱帯産の植物に比べて藍色染料（インディゴ）の含有量が圧倒的に低すぎました。（インド藍は約50%、タデ藍は約5～10%）

起死回生を図るべく最後の手段として望みを託したのが、本県出身で薬学^{ながい}界の権威長井長義^{ながよし}博士発明の「長井精藍」でした。しかし、最終的に商品するまでに至らず失敗に終わったのでした。（ましてや100%含有する化学合成藍にはまったく太刀打ちすることができませんでした。）

吉野川の恵みに立脚したタデ藍による阿波藍の繁栄をもたらした藍産業でしたが、最後までタデ藍にこだわった事による挫折・失敗であったというのは歴史の皮肉かもしれません。



【写真 5】長井精藍伝習所の製造工場内部
『阿波藍譜』精藍事業編より

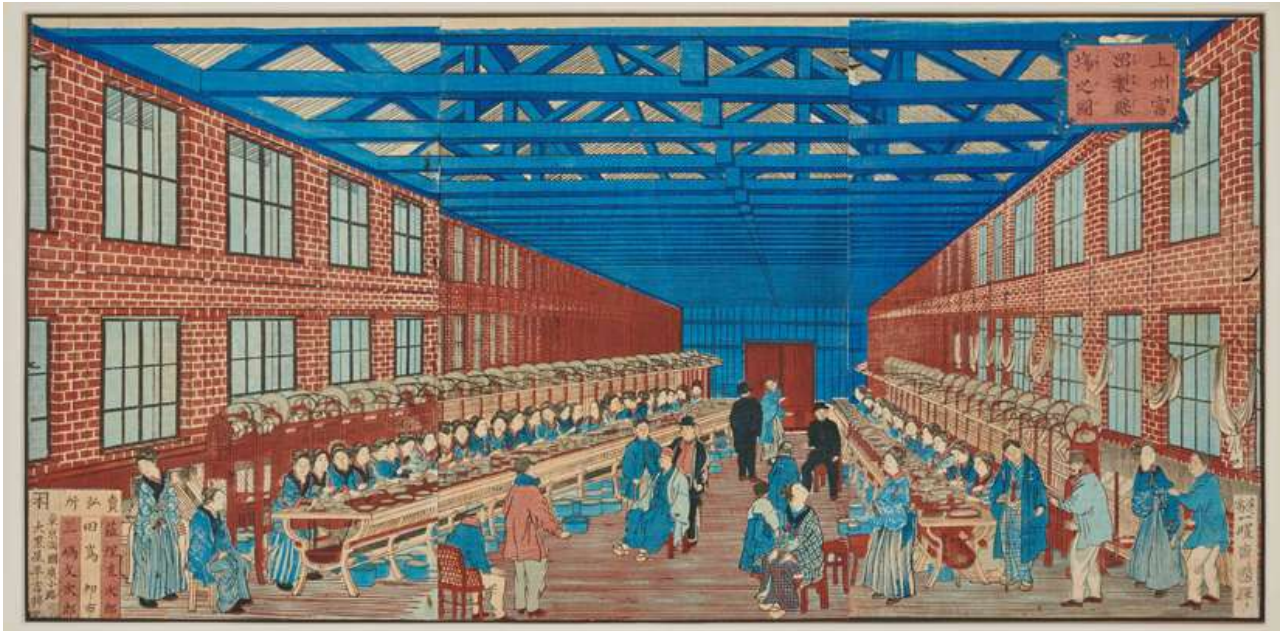


【写真 6】長井 長義の肖像
（1845～1929）

『阿波藍譜』精藍事業編より

2. 養蚕・製糸業への転換 ―藍から蚕・繭・生糸へ―

阿波藍に見切りをつけはじめた藍業者たちが着目した産業は「蚕業」（養蚕・生糸）でした。「殖産興業」を掲げた明治政府も外貨獲得のための資金作りに着手したのも製糸業でした。官営の「富岡製糸場」（群馬県）を建設するなど育成に全力を投入しました。その結果「生糸」は輸出品の三分の一を占めるまで成長し、近代日本の産業経済を支えるドル箱となったのです。



【図 4】官営富岡製糸場の錦絵と写真 ―曙斎国輝「上州富岡製糸場之図」

（岡谷蚕糸博物館提供）

徳島県においても蚕業に着目し、明治2年には「物産係」が置かれ蚕業振興がはじまりました。藍師や藍商たちも藍からの蚕業転換には組しやすいものでした。藍づくりの生産システムがそのまま転用できると考えたのです。藍業者たちは養蚕業への転進に望みを託しました。

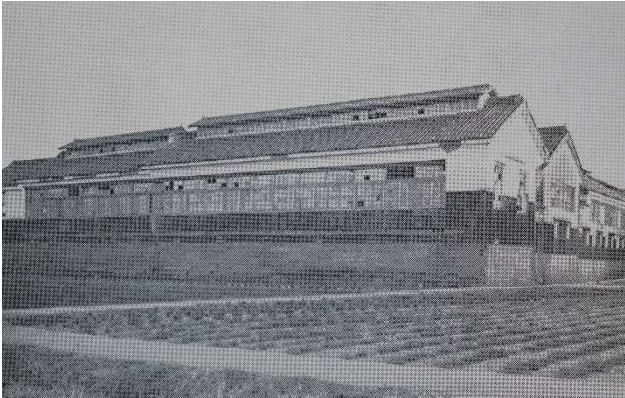
藍作人たちによって藍畑に桑を植え、寝床や藍蔵を利用して蚕を飼い、繭をつくるのです。生き物である「蚕」の飼育は、薬（すくも）づくりと異なり、勝手が違うため、病気が蔓延して全滅するなど、もくろみどおりには行きませんでした。藍づくりの企業的精神が生かされました。

失敗を繰り返しながら蚕業転換が本格化したのは、やはり藍業の衰退がはじまる明治中後期に至ります。

肥沃な吉野川流域に展開した藍に替わって植え付けられたのは「桑」でした。畑作物の桑はよく肥えた土壌でグングン成長し、見事な桑園を形成していきました。藍畑は見る間に桑畑へと変貌をとげて行っただけです。

吉野川の恵みによる良質の桑の葉により「蚕」は見事な繭をつくり、同時に水質のよい吉野川の「生糸」の生産にとって好都合で、優れた品質の製品を生み出しました。吉野川流域の藍作地帯（鴨島町・石井町・脇町など）には製糸工場が次々と建設され、製糸業は一大産業となっていきました。鴨島には筒井製糸など13の工場が生まれ「蚕都」と呼ばれ賑わいました。

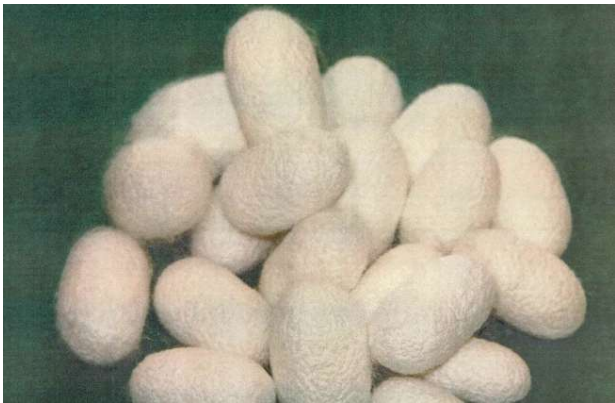
写真にみる徳島の養蚕・製糸



【写真7】製糸工場に改造された「東生社」の「藍蔵」
（石井町・生田家）
新居 幾代『私の旅』より



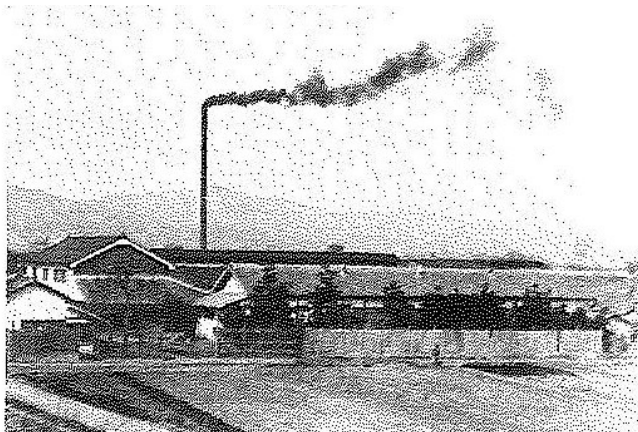
【写真8】藍畑が桑畑に変貌した吉野川流域と「蚕室」
（川島町・後藤田家）
（徳島県立文書館提供）



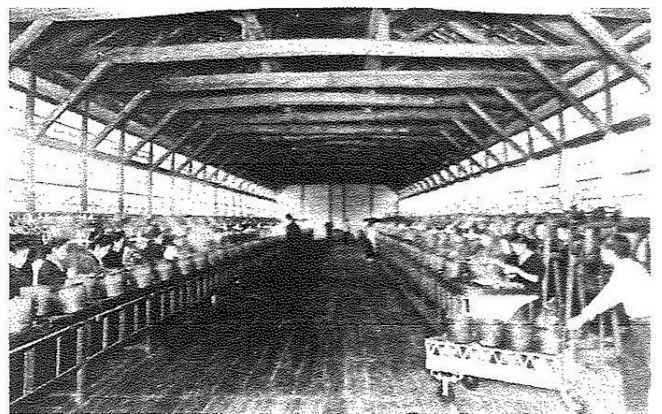
【写真9】繭の写真



【写真10】養蚕作業の風景
（川村 泰史 氏 撮影）



【写真11】煙突は製糸工場のシンボル
（鴨島町・笠井製糸）



【写真12】製糸工場内部の写真
（鴨島町・笠井家）

【写真9～12】および【図5、6】は徳島県立文書館提供 展示図録「近代阿波の養蚕―藍から繭へ―」より引用

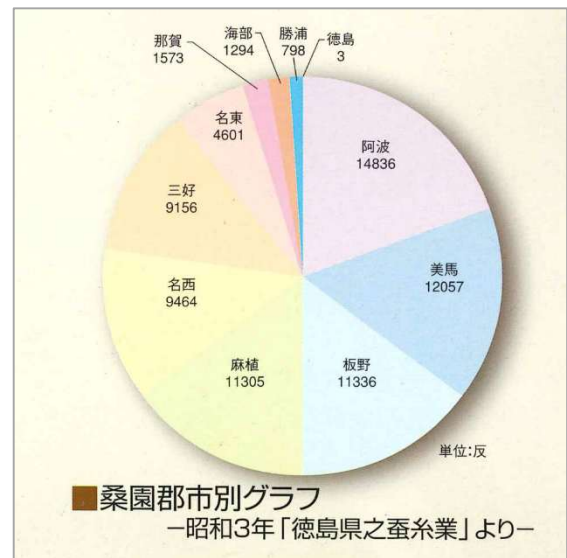
明治末期から大正期にかけて徳島県は全国でも有数の養蚕県に成長したのです。農家では養蚕業は「おかいこさん」と呼ばれ、貴重な現金収入をもたらす副業としてしっかりと定着していきました。

しかし昭和期に入ると高級絹織物は世界恐慌の直撃を受け、続く世界大戦は製糸業に大打撃を与えてしまいました。起死回生をもくろんだ戦後の復興も化学繊維ナイロンの出現により不調に終わりました。現在では県内の養蚕製糸業は壊滅状態にあります。以上が、地域産業の藍から蚕業・製糸業への転進の顛末です。

今回は、もう一つの大きな転換である稲作への転換を紹介したいと思います。



【図5】桑園面積・繭生産量・養蚕実戸数の変遷



【図6】桑園都市別グラフ

【参考文献】

- 『阿波藍譜』精藍事業編 三木文庫 1971
- 『天半藍色』三木文庫 1974
- 『藍農工作之風景略図』(石井町蔵) 四国大学 2020
- 『武知家住宅調査報告書』石井町 2016
- 『近代徳島の歴史像』立石 恵嗣 原田印刷 2016
- 「近代阿波の養蚕ー藍から繭へー」徳島県立文書館企画展図録 2009

「吉野川歴史探訪」のバックナンバーは、「Our よしのがわ」のウェブサイトに掲載しています。本号掲載記事と合わせて引き続きお楽しみください。

「Our よしのがわ」バックナンバーウェブサイト

